

## 私の被爆体験

空フミコ (2007年記)

私は1929年に生まれ、広島からおよそ20kmの田舎で育ちました。

1942年、私は広島の女学校に入学すると、家を出て学校の寄宿舎に入りました。1年生の時は、ごくありふれた普通の学校生活でした。しかしながら次の年になると、太平洋戦争が緊迫して来たので、すべてがどんどん悪い方向に向かいました。女学生でさえも、武器を磨いたり、兵隊さんの制服を繕ったり、たばこを詰めたり、牛肉の缶詰を作ったりなどの、戦争を補佐する作業のために動員されました。

1944年、3年生の時に、私は学校で勉強する代わりに、動員学徒として軍の飛行機を作る工場で働き始めました。

4年生の時、女学生でさえ昼夜交代制で、午前7時から午後3時、または3時から夜の11時迄働かなくてはなりませんでした。

1945年8月6日、私は昼の当番でしたので、朝7時に工場に行きました。工場に着くとすぐに警戒警報が鳴り、すぐに工場の外にある防空壕に入りました。およそ30分後警戒警報は解除されましたので、私は工場に戻りました。当時は飛行機の部品が不足していましたので、私たちはそれが届くのを待っていました。

原子爆弾には主に3つの威力があります。熱線、爆風、放射能です。私は爆風の犠牲になりました。私は倒壊した建物の下敷きになり、片目を失いました。私の働いていた軍の工場は爆心地から2.7kmの所にありました。爆風の瞬間に外にいた幼い子どもを含む大勢の人が爆風の圧力によって殺され、屋内にいても何人かは即死でした。私はその8月6日についてお話しようと思います。

私が窓辺に黄色い光を見たのは8時15分でした。電気がショートしたのかなと思いました。続いてゴーという大きな音がしたので、「爆弾だ！逃げなければならない！」と思いました。振り向いた瞬間、頭の上にスレートの破片がシャワーのように落ちてきました。そこで私が見たものは、天井ではなく青い空でした。

しばらくの間瓦礫の下にいましたが、友人の助けを借りて何とか外に出ました。たくさん血だらけの人々が大声で叫びながら走り回っていました。ピンク色になった腕や脚をキ

ユーピー人形のように伸ばして横たわっているのを見て驚きました。私もまた怪我をしていました。頭、顔、両腕から血が噴き出ていましたので、友人が救護所に連れて行ってくれましたが、そこにはすでに多くの怪我人が集まっていました。私は頭と顔に三角巾を巻いてもらっただけでした。その後、頭上に金属音を響かせて飛ぶアメリカの B29 軍機に脅かされながら、焼けるような陽射しの下をはしりまわり、ようやく防空壕に避難しました。着いた途端に激しい痛みを襲われ、横になりすぐに眠ってしまいました。

「フミコ？そこにいるのはフミコか？」という声に私は目覚めました。どのくらいの時間がたったのかはわかりませんでした。その声は父でした。父に会えて嬉しく、安堵しました。父は私を田舎の家に連れて帰ろうとし、私を自転車に乗せ、自分は私を支えて自転車の横を歩きました。私は左目がとても痛くて目を開けることができなかったからです。

しばらく行くと、父が「歩けないか、フミ？自転車を押せないんだよ。」と言いました。それで、私は自転車から降りました。怪我をしていない目を開けてみると、私たちの工場だけではなく、広島市全部が空襲に合ったことに私は気付きました。

長く目を開けていることができなくて、私は再び自転車にりましたが、瓦礫のせいで自転車がパンクしてガタガタし始めました。それは傷ついた目には耐えがたい痛みでした。しかし、自転車に乗ったり降りたりしながら、とにかく私たちは家を目指しました。途中、父は私を見つけるのがどんなに大変だったかを話してくれました。私の田舎は広島から 20km 離れていました。そんなに遠く離れていたにもかかわらず、父は大きな爆音を聞いたのです。そして広島に何かとてつもない事が起きたに違いないと思ったのです。近所の人と一緒に、父は娘と奉仕作業をしていた中学生の息子を探すために直ちに家を出たのでした。

父は広島市の近くに来た時、よろよろと歩いている男の子を見ました。その子の頭は灰色の風船のようでした。父は近づいてみて、その子が自分の息子だとわかりました。その子が自分の子だとわかっただけ幸運でした。弟は顔、両手、両脚に火傷を負っていましたので、父は近所の人に彼を家に連れて帰ってくれるように頼みました。それで、父は私を探すため、引き続き市内に向かいました。しかし、市内全体が大火事になって行く手を阻みましたので、何度か諦めかけました。それでも、私の学校の近くの橋の上でたくさんの火傷を負った女学生が虫の息で「お母さん、お母さん！水、水」と呼んでいるのを見て、娘の私を探し続けることにしたということです。夕方になってようやく父は私を見つけました。父は家に帰る道中にこのように話してくれました。

私たちが田舎の家に着いた時は、もうすっかり夜がふけていました。それでも、すぐにお

医者さんの所に行きました。お医者さんは「この傷はたいしたことはない、嫁入りの傷にはならないよ。まぶたの腫れがひけば、すぐに目が開き、また見えるようになりますよ。」と言ひ、瞼の傷を縫い合わせてくれただけでした。激しい頭痛と痛みでしたが、氷で傷を冷やす事しか手だてがありませんでした。お医者さんは痛み止めを持っていなかったのです。腫れた目が良くなり、再び瞼が開くことを期待して、一週間、辛抱強く待ちました。

しかし、一週間たっても変化はありませんでした。そこで私は自分の指で瞼を開けてみると、何か黒い物が瞳孔から出てきているのが見えました。自分の目に一体何が起ったのかと思い、姉に連れられ、すぐにお医者さんの所に行きました。すると「あ、これは目の球までやられている。もう見えるようにはならないよ。」と言われ、絶望しました。

氷で冷やし、激しい痛みにも苦しみながら横になっているしかなく、一か月がたちました。私の隣には、ひどい火傷を負い、顔、両手、両脚に白い軟膏を塗られた弟がいました。高熱を出し「痛い、痛い！」と呻きながら腕を上を振り上げて寝ていました。その火傷のあとからたくさんのウジ虫がわきだし、母が箸で取り除いていました。

八月の末までには、ようやく目と頭の痛みが取れました。9月16日に、私は通っていた広島市の女学校に行きました。校舎が壁の一部を残して焼け落ち、体育館の鉄骨がねじ曲がっているのを見て途方にくれました。そこで私たちは、爆弾により私たちの学校の生徒と先生が400人亡くなったと聞かされました。

爆弾で亡くなった400人は、主に1年生と2年生でした。彼女たちは防火帯を作るために動員されて建物疎開の場所にいました。当時はたいてい大きな街は空襲に会い、焼け出されてきました。だから防火帯を作ることはとても重要でした。緊急時のための空き地も必要でした。私の寄宿舎の同室の4人も学徒動員中に爆撃で亡くなりました。

その日、およそ8000人の学生が建物疎開または軍の施設で働くために広島市内に動員されていました。原爆で約6000人の学生が殺されたとはなんと残酷なことでしょうか。

8月6日以降の私の家族にはさらに悲しい出来事がありました。赤痢が流行し、広島から私の田舎にも広がりました。2番目と3番目の弟と赤ん坊の妹が入院しました。妹は9月の初めに死にました。そして父の白血球数が減少し始め、原爆病でしばらくの間苦しみました。というのも、私と弟を探すため、原爆投下直後に広島に入りましたし、一週間市内で救護活動に従事していたからです。直接原爆に会った人たちに加えて原爆投下後に広島に入った人たちもまた残留放射能によって、ひどく影響を受けたのです。

10月に入り、私はなんとか目を治したいと思い、広島郊外の別の眼科医を訪ねました。しかし、そのお医者さんは、「どうすることもできませんよ。義眼を入れることもできません。」と言いました。原爆がさく裂した時、天井のスレートの破片が私の顔の上に落ちてきて左目に刺さったのです。そのため、眼球と瞼がくっついてしまったのでした。

しかしながら、幸運なことに、12月に有名なお医者さんに手術をしてもらうことができました。くっついていた眼球と瞼を切り離す手術を行い、ガラスの義眼を眼球の上にかぶせていただきました。お医者さんは、「きれいな目になりましたよ。左を見て。右を見て。眼球がきちんと動きますね。」と言われました。見た目がとても良くなりました。

私は自分ひとりで生きられるように仕事をしようと思いました。女学校を卒業するとすぐに、学校の先生になるために大学に行きました。勉強をしすぎるといつも、傷ついた目はとても痛み、血の混じった膿が出ました。その上さらに悪いことに、目の上にかぶせていたガラスの義眼が壊れ、同じような義眼を入れることはできないということでした。新しい義眼は分厚く、私の目に合いませんでした。目を動かすたびに義眼がひっくり返るので人前に出るのが嫌になってしまいました。

何年か後に、改良されたプラスチック製の物が使えるようになり、問題は解決されました。何はともあれ、私は教師の資格を取ることができ、中学校で教え始めました。

1969年に、広島原爆被爆教師の会が結成されました。原爆がいかにもむごいか、戦争がいかにも愚かでひどいものかを伝えるべきだと考えたのです。

このようにして、原爆で生き残った教師たちはそれぞれの学校の教師たちと協力しながら平和教育を進め始めました。平和教育に学校全体が関わるようにしました。今日に至るまで推進してきた平和教育は、次の3つの大きな柱に基づいています。

1. 戦争とは何か。そして原爆はどのような物か。
2. 戦争が起こされる原因は何か。
3. どんな力が平和を維持できうるか。

ここでは、2番目の柱に焦点を当てたいと思います。最初の教材で戦争と広島への原爆のむごさ、非人道性を学んだ生徒たちは、「なぜそのような残酷な戦争が起こったのか。」という疑問を抱きます。私たちは、彼らに「戦争が起こされる原因」を理解させなければなりません。

戦争が起こされる原因の一つは、新興国だけでなく先進の資本主義の国が、天然資源、領

土、市場、あるいは自国の利益のために、未開発国を力づくで支配したことです。日本は中国大陸を侵略し満州事変が起こりました。それは日中の 15 年戦争を引き起こし、日本は中国を支配しました。この間に多くの無抵抗の中国人たちが犠牲になりました。

原爆は通常兵器とは異なり、非人道的な兵器です。全日本被爆教師の会の会長だった石田明さんは、あの日爆心地から 800 メートルの所を走っていた電車の中で被爆しました。彼は若い時白内障を発症しました。大腸がんと皮ふがんの手術も受けました。74 歳で、2 年前に亡くなりました。彼は原爆の放射能の後遺症に関して、亡くなるまでずっとチェックの対象となっていた人の一人でした。

今日、若い先生方は中国や朝鮮半島や他のアジア諸国を訪れることによって自分たちの理解を深めています。彼らは自分たちが作った教材を使って生徒たちに日本の歴史の加害者としての側面を、例えば植民地政策によって日本に強制的に連行された朝鮮人たちの事を、教えようとしています。彼らはそのことを劇にしたり、紙芝居にしたりしています。

原爆が落とされ、日本が敗れてから 62 年が経ちます。それでも世界にはおよそ 3 万発の原子爆弾があります。その上、今の原子爆弾は広島に投下された爆弾より一千倍もの威力があるのです。核兵器と人間は、到底共存はできません。人類が前進することのできる唯一の方法は、もう一つの広島あるいは長崎を作らないことです。

私は外国の方々が日本人と共に、核兵器廃絶と戦争のない世界を目指す知恵を共有して共に活動することを望みます。

1986 年に、私は教師を退職し、主にワールド・フレンドシップ・センターでボランティアとして平和活動をしています。

(2016 年 3 月没)